国土交通省
Ministry of Land, Infrastructure, Transport and Tourism
Press Release

同時発表：内閣官房

水の週間関連行事

令和８年７月24日
水管理・国土保全局
水資源部水資源政策課

全日本中学生 水の作文コンクール入賞・入選作品が決定!
～最優秀賞・優秀賞者の表彰式を行います～

全国の中学生及び海外日本人学校在学の日本人中学生を対象に、「水について考える」をテーマに全日本中学生 水の作文コンクールを開催しており、第 48 回の今年は総数 9,082 編の応募をいただきました。
審査の結果、最優秀賞（内閣総理大臣賞）１編のほか入賞・入選作品を決定しました。
最優秀賞・優秀賞以上の作品については、令和８年７月 31 日（金）にニッショーホール（東京都港区）にて開催される第 50 回「水の日」記念行事「水を考えるつどい」において、表彰式を執り行います。

本コンクールは、「水の日」（８月１日）及び「水の週間」（８月１日～８月７日）の行事の一環として昭和 54 年より実施しているものです。次代を担う中学生を対象とし、広く水に対する関心を高め、その理解を深めることを目的としています。

【作文コンクール入賞・入選作品】
＜最優秀賞　１編＞

○内閣総理大臣賞
氏名　背黒（せぐろ）　五希（いつき）　（神奈川県　横浜市立樽町中学校　２年）
題名　水の音が変わった日

＜優秀賞　９編＞

○農林水産大臣賞
氏名　南（みなみ）　穂香（ほのか）　（東京都　東京都立桜修館中等教育学校　３年）
題名　奇祭「水止舞」が教えてくれること

○経済産業大臣賞
氏名　小林（こばやし）　衣智花（いちか）（群馬県　群馬大学共同教育学部附属中学校　３年）
題名　田んぼに映るもう一つの空

○国土交通大臣賞
氏名　弘松（ひろまつ）　詩菜（しいな）　（愛媛県　愛媛大学教育学部附属中学校　３年）
題名　一滴の雨水をつなぐ

〇環境大臣賞

氏名　岡本（おかもと）　環菜（かんな）　（徳島県　鳴門教育大学附属中学校　１年）

題名　街の宝物「のぞみの泉」が繋ぐもの

〇全日本中学校長会会長賞

氏名　牧野（まきの）　翔（かける）　（静岡県　静岡市立大川中学校　３年）

題名　小さな手助け

〇水の週間実行委員会会長賞

氏名　伊東（いとう）　心凪（こなぎ）　（北海道　北海道教育大学附属函館中学校　３年）

題名　水の日からつながる世界

〇独立行政法人水資源機構理事長賞

氏名　萩原（はぎわら）　美姫（みき）　（香川県　丸亀市立南中学校　２年）

題名　水の明日を考える

〇シャワーズ賞

氏名　前田（まえだ）　想悟（そうご）　（神奈川県　横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校　３年）

題名　水循環の中に見つけたつながり

〇中央審査会特別賞

氏名　佐藤（さとう）　美瑳紀（みさき）（インド　ニューデリー日本人学校　１年）

題名　人々の生活と水

＜入選　３０編＞

※優秀賞以上の作品は別紙１のとおりです。

※入賞者・入選者の一覧は別紙２のとおりです。

※表彰式では東京都の地方審査で選ばれた東京都知事賞も同時に表彰します。

最優秀・優秀作品については、以下の HP でご覧になれます。

http://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/tochimizushigen_mizsei_tk1_000010.html

「水を考えるつどい」については以下の HP をご覧ください。

https://www.mlit.go.jp/mizukokudo/mizsei/tochimizushigen_mizsei_tk1_000024.html

「健全な水循環」ロゴマーク

【問い合わせ先】

水管理・国土保全局 水資源部 水資源政策課　満岡、古瀬、橋本

代表　03－5253－8111（内線：31156、31143、31155）

直通　03-5253-8386

内閣総理大臣賞（最優秀賞）

水の音が変わった日

神奈川県　横浜市立樽町中学校　二年　背黒　五希

　私は水が好きだ。夏になると、水の中にいる時間が増える。市民プールで泳ぎ、毎年キャンプで道志川に入る。川の水は驚くほど冷たく、足を入れた瞬間、思わず声が出る。流れに身をゆだねると、体がすっと軽くなり、どこまでも運ばれていくような気がする。川の流れは、離れているときは雨のように聞こえ、遊んでいるときは、光や暑さ、セミの声にまぎれていった。息を止めて潜ると、外の音が遠のき、静かな世界になる。その中で目を開けると、川底にはニジマスやアユが泳ぎ、光がゆらゆらと揺れている。とてもきれいだ。何度も岩から飛び込み、流れに乗って笑う。水は、私にとって「楽しいもの」だった。

　そんな私の水のイメージが大きく変わったのは、能登半島地震のときだ。母の実家がある金沢にいたとき、緊急地震速報の後、突然の大きな揺れがあった。家族で避難し、安全が確認されてから祖父の家に戻ると、しばらくして水が止まった。蛇口をひねっても、いつものような水の音はせず、水は出てこない。その静けさが、かえって不安を大きくした。

　母と一緒にスーパーへ水を買いに行ったが、棚には一本の水も残っていなかった。お茶やスポーツドリンク、ジュースは並んでいるのに、水だけがない。その光景を見たとき、水はただの飲み物ではないのだと気づいた。水は、飲むだけでなく、料理や手洗い、トイレなど、生活のすべてに関わっている。だからこそ真っ先に必要とされ、なくなってしまうのだ。家に戻っても、水は出ない。手を洗うことも、顔を洗うこともできない。トイレの水も気にしながら使う。たった一日でも、生活は大きく変わった。これまで何も考えずにしていた行動の一つ一つが、水に支えられていたことに気づいた。水がないということは、「不便」ではなく、「不安」だった。

　道志川で感じていた水とは、まったく違うものだった。あのときの水は、流れに乗って遊ぶことのできる楽しい存在だった。しかしここで失われた水は、生活を支えるために欠かせないものだった。同じ水なのに、こんなにも意味が違うのかと驚いた。それ以来、私は水の見方が変わった。普段の生活でも、水を意識するようになった。米のとぎ汁は捨てずにプランターの野菜の水やりに使う。お風呂は家族で続けて入り、残り湯も活用する。食器は水をためて洗い、流しっぱなしにしない。洗濯にはお風呂の残り湯を使う。特別なことではないけれど、水を「使う」というより、「無駄にしないように回す」感覚になった。考えてみると、水はいつも姿を変えながら、私たちのまわりを巡っている。道志川の水も、もとは空から降った雨だ。その水が川となって流れ、やがてどこかで人の生活を支える。私が使った水も、見えないところで誰かにつながっているのかもしれない。私は以前、水は「あるもの」だと思っていた。しかし今は違う。水は、ただそこにあるのではなく、私たちの暮らしを支えている存在だ。そしてそれは、自然の循環だけでなく、水を届ける仕組みや人の働きによって成り立っている。だからこそ、水が止まったとき、私たちは安心も一緒に失ってしまうのだ。水は暮らしを支えるしくみであり、私たちの命そのものだ。

　水は色も形もなく、普段は意識することが少ない。でも、その見えない存在が、私たちの生活を静かに支えている。道志川で感じた楽しさも、断水で感じた不安も、どちらも水がもたらしたものだ。その両方を知った今、私は水をただ消費するのではなく、大切に使い続けたいと思う。蛇口をひねれば水が出る。その当たり前の中に、安心がある。水とは、私たちの暮らしを支える「見えない安心」なのだと、私はあの日、はじめて知った。それ以来、水の音は、少し違って聞こえるようになった。

農林水産大臣賞（優秀賞）

奇祭「水止舞」が教えてくれること

東京都　東京都立桜修館中等教育学校　三年　南　穂香

私の住んでいる地域では、毎年七月に「水止舞」という不思議な祭りが行われる。名前の通り雨を止める祭りなのだが、なぜか観客までもが水をかけられ、びしょぬれになる。幼い頃、家族と見に行った私は、突然水をかけられて驚いた。周りの人たちも笑いながら水を浴びていた。その様子を見て、私は不思議に思った。雨を止めるための祭りなのに、なぜ水をかけるのだろう。この疑問が、私が水について考えるきっかけになった。

この謎を解くため、私は祭りの由来を調べてみた。すると、この祭りは、今から約七百年前の出来事がきっかけで始まったという。当時、干ばつに悩む人々のため、とある僧が雨乞いの祈祷を行うと、見事に雨が降った。しかしその二年後、今度は雨が降り止まず、水害となり、多くの人が他国へ逃げる事態となった。そこで、その僧は「水止め」の儀式を行った。すると雨が止み、晴れたため、それ以来この儀式は「水止舞」として続けられるようになったという。現在の「水止舞」は、前半が雨乞い、後半が雨止めの儀になっていてこの雨乞いの際に周りに水をかけるのだそうだ。

「雨乞いの後に雨止めをするなんて、勝手すぎる」と私は思った。しかし、考えてみると、それだけ昔の人にとって、水は重要だったということだ。雨が降らなければ作物が育たない。そうなると食べるものがなくなってしまい、命に関わる。けれども雨が降りすぎれば洪水となり、家や田畑が流されてしまう。これも命に関わることだ。水がないと生きていけない。だがありすぎても生きていけない。それを当時の人々は理解していた。しかし、その時代、自然の影響をコントロールすることはできなかったため、祭りや祈りを通して水の力と向き合っていたのだろう。

現代に暮らす私たちはどうだろう。ダムや堤防が作られたり、貯水施設が整備されたりと、自然の影響をある程度抑えられるようになった。天気予報によって、今後の天気もわかる。自然そのものをコントロールすることは難しいが、その影響を減らすために技術や知識を使い、対処するようになってきている。もちろんこれは素晴らしいことだと思う。

しかし、その安全になれることで、水の怖さや大切さを忘れてしまう人もいるのではないだろうか。昔よりも水の力を身近に感じる経験が少なくなった。雨が多く降っても、大きな被害はあまり出ない。水道も整備され、蛇口をひねればすぐに安全な水が手に入る。そんな環境が当たり前になったことで、水は限られた量しか存在せず、命を支える存在であると同時に人々を脅かす存在であるという感覚が薄れてしまっているように感じる。

もちろん、それを知ったところで渇水や洪水がなくなるわけではない。自然そのものを完全に支配することはできないのだから。特に近年は地球温暖化により異常気象も増えており、日本も例外ではない。このさき、ダムや堤防では防げないような水不足や大洪水が起きる可能性だってある。そんな時、困るのは誰なのか。水の大切さや性質を知っていれば、いざというときも落ち着いて判断し、行動できるかもしれない。しかし知らなければ命や生活に被害が出るかもしれない。だから、水を学び、その性質を理解し、対処の方法を考えることは、身を守るために重要だと思う。

こう考えると、「水止舞」が七百年も続いてきた理由もわかる気がする。昔の人は水の力を肌で感じ、祭りや祈りを通して向き合ってきた。現代の私たちも、水を身近に感じ、学び、考え、行動していくことが必要だ。水の安全になれている今だからこそ、改めて水の性質や大切さについて学ぶべきことがある。「水止舞」は、私たちにそう伝えてくれているのだろう。

経済産業大臣賞（優秀賞）

田んぼに映るもう一つの空

群馬県　群馬大学共同教育学部附属中学校　三年　小林　衣智花

　朝の冷たい空気の中、自転車のペダルをこいで学校へ向かう。通学路の横には広い田んぼが広がり、張られた水が静かな鏡のように空を映している。白い雲がゆっくり流れ、その姿は水の中でも同じように動いている。まるで空が地面の上に、もう一つ生まれたようだった。

　私は毎日この道を通って学校へ行く。それでも、田んぼの水面に映る空を見るたびに、不思議な気持ちになる。

　ある日の帰り道、夕焼けに染まった田んぼの前で私は自転車を止めた。赤く染まった雲が水面に映り、風に揺れてゆっくり形を変えている。その景色を見ながら、ふと考えた。

　この水は、どこから来たのだろう。

　私たちは毎日、水を当たり前のように使って生活している。朝、顔を洗うとき。のどが渇いて水を飲むとき。料理をするときやお風呂に入るとき。蛇口をひねれば水は流れてくる。私はそれが当然のことだと思っていた。

　しかし授業で水の循環について学んだとき、その当たり前の意味が少し変わった。海の水は太陽の熱で蒸発し、雲となり、雨や雪となって地上に降る。そして川となって流れ、再び海へ戻る。水は形を変えながら、長い時間をかけて地球をめぐっているのだという。

　その話を聞いたとき、私は毎日自転車で通る田んぼの水を思い出した。あの水も、遠い海から始まった長い旅の途中なのかもしれない。そう思った瞬間、いつもの通学路が少し違う景色に見えた。

　群馬県には、関東を流れる大きな川、利根川がある。山に降った雨や雪は川となり、その流れは遠くの町や人々の暮らしを支えている。利根川の水は農業や工業、そして私たちの生活にも使われていると聞いた。田んぼに張られた水も、そうした川の流れとどこかでつながっているのだろう。

　水があるから稲は育ち、秋には黄金色の穂を実らせる。そしてお米となって、私たちの食卓に並ぶ。私はそのことに気づいたとき、水はただ流れているだけのものではなく、命や暮らしを支える大切な存在なのだと感じた。

　しかし水は恵みだけではない。ニュースでは、大雨による洪水や水不足の問題が伝えられている。水は私たちの命を支える存在であると同時に、大きな自然の力でもあるのだ。

　だからこそ人々は昔から水と向き合い、知恵を重ねてきた。堤防を築き、水路を整え、ダムをつくり、水の流れを調整する。そうした努力の積み重ねがあるからこそ、私たちは水の恵みを受けながら安心して生活することができている。

　私はこれまで、水を使うときにその背景を考えたことがなかった。しかし今は、蛇口から流れる一滴の水の向こうに、長い自然の循環と多くの人々の努力があることを想像するようになった。

　もし私が水を無駄に使えば、その一滴は本来どこかで必要とされていたかもしれない。そう思うと、水を大切にすることは決して小さなことではないと感じる。

　今日も自転車で通る途中、田んぼの水面には夕焼けの空が映っていた。赤く染まった雲が水の中でゆっくり揺れている。その景色は、まるで空がもう一つ地面に広がっているようだった。

　私はその景色を見ながら思う。

　この水は、どれほど長い旅をしてきたのだろう。

　海から空へ、空から雨へ、雨から川へ、そしてまた海へ。

　水を大切にするということは、未来の空を守ることなのだ。

国土交通大臣賞（優秀賞）

一滴の雨水をつなぐ

愛媛県　愛媛大学教育学部附属中学校　三年　弘松　詩菜

蛇口をひねれば透き通った水が勢いよく流れ出す。度重なる渇水の歴史を持つ私の街・松山では、それが当り前ではないと知っている人たちがすぐそばにいる。私の親の世代は、平成六年の「平成の大渇水」で一日の大半が水の出ない時間断水を百二十三日も経験したという。水が出ない不自由さと、一滴の重みを知る人々がそばにいるのに、便利な環境で育った私はその記録をどこか遠い出来事のように受け止めている。

地球にやさしくという言葉をよく耳にする。しかし、空気や水がなければ生きられない人間が自然を「守ってあげている」かのように振る舞うのは傲慢ではないか。人間は地球という大きな循環の中に「いさせてもらっている」存在にすぎないのに、私はいつの間にか水を「コントロールできる資源」として扱っていた。その無意識の姿勢が形となって現れているものの一つが雨の日の傘袋だ。商業施設の入り口に設置されてゴミとして散らばる傘袋を目にするたびにモヤっとしていた。使い捨ての傘袋はエコではないし、渇水に悩む街で、傘についた雨水を「汚れ」として袋に閉じ込め捨ててしまうことも違和感の一つだった。本来なら土に染み込み、川へ還り、命をつなぐはずの雨水が、建物に入った瞬間に循環を断ち切られてしまう。外では命をつなぐ水が建物の中では汚れになる。

松山市は、ダムの底が見えるほどの渇水を何度も経験し、先人たちは節水型都市づくりに力を注ぎ、今でも広報車が節水を呼びかけている。しかし、私たちの意識はどうだろう。蛇口をひねれば水が出ることを疑わない私たちは、一滴の重みも感じずに水を使い続ける。高度なインフラが整った安心感が水への敬意を薄れさせているのではないか。

その気づきが、愛媛大学のジュニアドクターでの私の研究につながった。行政が管理する地下タンクや配管の中で行われる循環は『見えない』。見えない循環は人の意識を変えない。だからこそ、多くの人が行き交う場所で雨水が命に戻る瞬間を『見える形』で示したいと考えた。

私が作ろうとしている装置とは、足踏み脱穀機のような形で人力でエアを送り傘の水滴を飛ばす仕組みだ。飛ばした雨水は下に集め、装置のそばに置いた観葉植物に与えることを想定している。自分の足の動きで飛ばした雨粒が目の前の土に吸い込まれていく。その瞬間「自分が雨水の循環に関わっている」という実感が生まれる。集まる水は一回につき数ミリリットル。植物を育てるには到底足りないし実用化も簡単ではない。それでも、この研究には大きな意味があると考えている。

二年が過ぎても、小さな改良を積み重ねながらチューブやプラ粘土と格闘し試作を続ける日々の中で、こんな少量の水に意味があるのか、やめたい、それでもやり遂げてみせるという気持ちが交差し続けている。うまくいかない日々がモチベーションも削っていく。これは装置との戦いであると同時に、諦めそうになる自分自身との戦いでもある。

行政が運用する巨大なシステムがあってこそ私たちの暮らしは守られている。それでも私の小さな装置にしかできないこともあると信じて迷い悩みながらも続けている。装置が完成し、街で使われる日が来ることを目指して私は一滴の水に向き合い続ける。その小さな行動が、水について考える人を一人でも増やせるかもしれない。

自然にやさしくするのではなく、自然にやさしくしてもらえるように生きていきたい。水を与えてもらい続けるために、考え、向き合い、小さくても行動を重ねること。その思いが今週末も私を試作品作りに向かわせる。その見えない積み重ねが、水の循環の中に私をつなぎなおしていく。

環境大臣賞（優秀賞）

街の宝物「のぞみの泉」が繋ぐもの

徳島県　鳴門教育大学附属中学校　一年　岡本　環菜

私の住む街には南小松島駅の前に『のぞみの泉』という名前の小さな水くみ場があります。小学生の頃は駅を使うことがなく、駅前にのぞみの泉という立派な水くみ場があるのを知りませんでした。しかし、中学生になると汽車通学が始まり、駅前にあんな立派な水くみ場があったんだと改めてその存在に驚きました。さらに驚いたのは、その水がどこから来ているかです。調べてみると地下二十九メートルという深い場所からくみ上げている『伏流水』だと知りました。しかも、のぞみの泉を囲んでいる岩は、勝浦川の上流にある『白亜紀』という恐竜がいた時代よりも昔の地層から運ばれてきたものだそうです。私は理科の授業で習った『水の循環』について詳しく知ることができてうれしかったです。

のぞみの泉を見ているといろんな人がやって来ます。大きなボトルを自転車にのせて、慣れた様子で水を汲んでいくおばあちゃん。部活帰りにおいしそうに水を飲む中学生。散歩の途中に飼い主さんと一緒に水を飲む犬。私が弟と水を汲みに行った時に隣にいたおばあちゃんが「ここの水でお茶を作ると、とてもおいしいのよ。やってごらん」と笑顔で話しかけてくれました。その笑顔を見て、私は大切なことに気づかされました。ここは喉を潤したり、水を持ち帰ったりするためだけの場所ではなく、この泉があることで普段はすれ違うだけの街の人たちが「いいお水ですね」と言葉を交わし、温かい気持ちを共有することができる。そんな、街の『心の交差点』のような役割を果たしているのだと思いました。蛇口をひねるだけで当たり前のように水が出てくる生活もいいけれど、わざわざ重いボトルを持って行き、のぞみの泉の水を汲んで自然の恵みをありがたくいただく。少し手間はかかるけど丁寧で豊かな暮らしが、この街にはずっと大切にされているのだと思って、心が温かくなりました。

でも、最近はニュースで世界中で水不足が起きていることや、環境汚染で地下水が飲めなくなっている場所があることを知りました。もし、この『のぞみの泉』の水が止まってしまったら。そう考えると、胸がぎゅっと苦しくなります。山に雨が降って、その水が土の中で長い時間をかけてきれいになり、私たちの元に届く。当たり前だと思っていたことは実はとても大事に守っていかなければならないものなんだと、中学生になってやっと気づきました。『のぞみの泉』という名前には、この街の未来を受けつぐ私たち子供が、健やかに育ってほしいという願いが込められているそうです。また、『この豊かな自然を未来まで繋いでいきたい』という願いも込められているのだと地域の人が言っていました。私もこの街の人の一人として、水を大切に使うことやゴミを捨てないといった、自分にできる小さなことから始めてみようと思いました。

水は私たちの生活になくてはならない便利なものですが、時には恐ろしい姿に形を変えることがあります。普段は穏やかに流れる川も、大雨が降れば一気に水が増え、全てを飲み込むような激しい流れに変わります。のぞみの泉をきれいな水を見ていると水が持っている本当の怖さを忘れそうになりますが、自然の力は私たちの想像をこえるものです。一瞬の油断が大きな事故をおこし、大切な命を奪ってしまうことも、他人事ではありません。水は決まった形がないので、どんな姿にでもなれる自由さと、人間には止められない怖さを両方持っています。だからこそ私たちは、水の恵みに感謝するのと同じくらい、その裏側にある危険についても正しく知っておく必要があります。この街の豊かな水がこれからも安全で優しい存在であり続けるために、私は水の持つ二つの顔をしっかりと忘れないで、水と正しく向き合っていきたいと思います。

全日本中学校長会会長賞（優秀賞）

小さな手助け

静岡県　静岡市立大川中学校　三年　牧野　翔

僕は時間があるとすぐに川へ釣りに行きます。そのくらい釣りが好きです。狙う魚はヤマメやイワナで、どうやったら釣れるのか、どんな仕掛けがいいのか、そんなことをいつも考えていました。しかし、ほぼ毎日通っているのに、釣れるのは週に一匹ほどでした。お父さんや周りの大人たちは、「昔は今よりたくさん釣れた」とよく言います。そこで僕は、「じゃあ、なんで今は減ってしまったのか。」釣りが好きなので、そのことについてどうしても知りたくなりました。そのため僕は小学校の五年と六年の二年間をかけ、おおかわ学という学習を通して研究をしました。この研究の始めに立てた予想は三つあります。

一つ目は気候問題です。気温や水温の変化は、魚の生態に大きな影響を与えるからです。

二つ目は水の量が減少したことです。水が地面の下を流れる伏流水となってしまい、魚の住む場所が減ってしまったのではないかと考えたからです。しかし、これら二つの原因は僕一人の力では解決できないと考えました。

そこで、僕が目をつけたのは、三つ目の護岸によって川の流れが速くなってしまったことです。コンクリートの護岸によって直線的になった流れの勢いを、石などを置いてゆるやかにすることができれば、僕の力でも魚が住みやすい環境を取り戻せるのではないかと考えました。

まずは、実験の許可をもらうために、静岡市役所の河川課へ連絡をしました。僕の提案を真剣に聞いてくれて、実験の許可をもらったときはとてもうれしかったです。

二〇二四年の六月から、いよいよ実験を開始しました。まずは、川に手を加えない状態でどれくらい魚がいるのかを確かめるために、魚の調査を行いました。手製の囲いを仕掛けて一週間後、期待をもってあけてみると、一匹のヨシノボリしかかかりませんでした。やはり、今のままの川では魚が住むのは難しいのだとはっきり分かりました。そのため僕は七月から九月の三か月間、川に石を置いて作った壁を十列作りました。台風などがきて、何度もくずれてしまいましたが、あきらめずに直し、流れをゆるやかにし続けられました。

十月になり、石の壁を作った状態ではどれくらい魚がいるのかを確かめるため、同じ囲いを仕掛けて一週間後、おそるおそるあけてみると、そこにはなんとアブラハヤが十六匹、シマドジョウが二匹と計十八匹がかかりました。この結果から、僕は確かな自信をもつことができました。最初は一匹もいないのではないかとおそるおそるあけた囲いですが、これだけの命が僕の作った水場に集まってくれたからです。ただ川が干上がるのを見ているだけでなく、自ら考え行動して、工夫をすれば、目の前の命を救うことができるのだと確信しました。

この経験を通して、環境を守ることは、他人事ではないと学びました。僕のような一人の小さな手助けでも、失われかけた命を繋ぐ力になれました。将来、僕は医師を目指したいと思っています。病気の人を救うことと、失われかけた川を救うことは、少し似ている気がしました。どちらとも助けを求める声に耳を傾け、あきらめずに最善を尽くすことが必要だからです。これからも僕は、川を救ったときと同じように、失敗したときでも試行錯誤を重ね失敗を成功に変えていきたいです。そのくり返しが、将来の夢につながると信じています。

水の週間実行委員会会長賞（優秀賞）

水の日からつながる世界

北海道　北海道教育大学附属函館中学校　三年　伊東　心凪

地震で停電になり、私の生活は一変しました。水が飲めない、お風呂に入れない、トイレの水も流せない。水がないことで生活が一気に成り立たなくなることを実感し、失って初めて、水がどれほど大切なものなのかを強く実感しました。私たちの日常生活には、当たり前のように清潔な水があり、意識することなく蛇口をひねり、水を流したままにすることさえあります。しかし、安全で清潔な水が得られることは決して当たり前のことではありません。

私はこの出来事をきっかけに、水について調べてみることにしました。そして、「水の日」について初めて知りました。「水の日」は、八月一日に水の大切さを考え、節水や水環境を守る意識を高めるための日です。なぜ八月一日なのか、はじめは疑問に思いましたが、暑さが厳しく、水の消費量が最も多くなる時期だからこそ、水の重要性が身にしみて感じられるのだと思いました。

また、八月は終戦日がある月でもあり、毎年この時期には平和や歴史について考える機会があります。私は、現在の日本では蛇口をひねれば当たり前に出てくる水が、戦時下ではどうだったのだろうと疑問に感じました。元兵士たちによる戦争の証言を取り上げたテレビ番組では、喉の乾きに耐えられなくなった兵士たちが田んぼや道ばたの泥水を口にしてしまい、コレラや赤痢がまん延し、亡くなる人もいたそうです。十分な水分を得られないまま猛暑の中を歩き続けることの過酷さは、想像を絶するものだと思います。

さらに調べてみると、世界には安全な水を飲めないことで命を落とす子どもがいます。ユニセフによると、二〇二四年時点で、二十一億人が安全に管理された飲み水を利用できず、一億六百万人は未処理の地表水に頼っているといわれています。また、水はきれいなだけでは十分ではなく、安全が保障されていることが大切です。しかし、多くの地域では水を手に入れるために、子どもたちが遠くまで水をくみに行かなければなりません。現在、三百三十万人の子どもが水くみをしており、毎日長い時間を水くみに費やしています。中には、一日に八時間もかかる場合があり、そのため学校に通う時間がなくなってしまいます。私はこの問題を知り、水が当たり前に使えることのありがたさと、水の安全が守られる社会の必要性を強く感じました。

私は今、テストのたびに募金をすると決めています。それは、自分の努力が世界の誰かを救うことにつながると考えることで、自分の頑張る力も高められるからです。ユニセフは、水が手に入らない地域の人々に水を届ける活動を行っています。募金をすることで、ユニセフを通して支援が届けられ、安全な水が人々の命を今日も繋いでいきます。

みなさんは八月一日「水の日」をどのように過ごすでしょうか。私は、同世代の人たちにも「水の日」を知ってもらい、水について考え、共に行動する日にしていきたいです。そして、一見つながりが見えにくい「戦争」と「水」を結びつけて考えることで、世界中の誰もが安全な水を使い続けられる平和な世界を守っていきたいです。

世界には安全な水がない厳しい環境で暮らす子どもたちがいます。安全な水が得られないために人々がどれほど苦しい思いをしているのかを考えれば、私たちの行動も変わるのではないかと思います。少額の募金や少しの節水でも、積み重なれば多くの命を支える力になります。すぐに成果が見えるわけではありませんが、できることを続けていきたいです。そして、「水の日」が水のありがたみに気付き、一人でも多くの人が行動を見直す日になるよう願っています。私は、これからも募金活動を続けるとともに、支援の輪を広げられる大人になりたいです。

独立行政法人水資源機構理事長賞（優秀賞）

水の明日を考える

香川県　丸亀市立南中学校　二年　萩原　美姫

香川県に住む私達にとって、水は本当に大切です。私は中学二年生ですが、毎年夏になると「今年も水不足になるのかな。」と心配になります。テレビのニュースや学校の授業でも、香川県は雨が少なくて水が足りなくなりやすいと聞きます。

水は、私達が生きていく上でなくてはならないものです。飲み水はもちろん、ご飯を作る時、お風呂に入る時、洗濯をする時、毎日たくさんの水を使っています。学校のトイレやプールの水も、工場で何かを作る時も、農業で野菜や果物を育てる時も水がなければ何もできません。もし、水がなくなってしまったら私達の生活は大変になってしまいます。だから、水を大切にする気持ちを持つことがすごく大切だと思います。

父や母が、

「お風呂や洗面の時は水を出しっぱなしにしないよ。」

と言っているのを聞くと、少しめんどくさいと思うこともあります。でも、それは香川県に住む私達にとって、とても意味のあることなんだとよく考えるようになりました。

水が少ない香川県で、これからもしっかり水を使えるようにするためには「水資源開発」というものがとても大切だと知りました。例えば、大きなダムを作って雨が降った時に水を貯めておくことや川の水をうまく利用すること等がこれにあたります。香川県には、香川用水という大きな水の通り道があって、徳島県の吉野川から水が運ばれてきています。これがあるから私達は普段の生活で困らないくらい水が使えるのだと知って、すごい技術だと感動しました。これからも新しい技術を使って、もっと効率的に水を使ったり海水を真水に変えたりするような方法も研究されていると聞いて将来が楽しみになりました。

将来、私は水について理想や夢を持っています。まず、香川県だけでなく世界中のどこでも、みんなが安心してきれいな水を飲めるようになることです。雨が降らない日があっても、水の心配をしなくても良い仕組みができたらいいと思います。そのためには、もっと水を大切にする気持ちをみんなが持つことが必要です。学校で水の授業を増やしたり、みんなで水を大切にするポスターを作り地域の人達にも広めたり、雨水を貯めて植物に水をあげたり、トイレに使ったりするシステムが多くの家で当たり前になったなら水の無駄遣いが減ると思います。「ＳＤＧｓ」という言葉も小学校で習いました。持続可能な開発目標のことで地球を大切にしてみんなが幸せに暮らせるようにするための目標です。その中に「安全な水とトイレを世界中に」という目標があります。水を大切に使うことはもちろん、海外でも水に困っている人達がいることを知り、支援できることがないか考えていくことも大切だと感じました。

私の家でも水の無駄遣いをしないように、みんなで心がけています。例えば、シャンプーをしている間や体を洗っている間はシャワーをこまめに止めることや食器を洗う時も油汚れを拭き取ってから洗剤を使うようにしています。そして、おじいちゃんの水やりの知恵です。雨が降る日には、必ず外に大きなポリバケツを出して雨水を貯めて、晴れた日にその雨水を畑にまいています。初めは「どうして、そんなことをするのだろうか。」と思っていましたが、水道水を使わずに畑の野菜に水をあげているのを見て、これが節水の工夫だと気づきました。こういった小さなことでも家族で意識して続けることが大きな節約に繋がるのだと思いました。

水は限りある資源であり、私達はそのことを意識して生活しなければいけません。これからも水を大切にする心を忘れずに、自分達にできることを一つ一つ実せんしていきたいと思います。

シャワーズ賞（優秀賞）

水循環の中に見つけたつながり

神奈川県　横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校　三年　前田　想悟

薄暗い竹林の中で、私はのこぎりを握り、ヘルメットとゴーグルを身に着け、竹を切っている。ふもとの街は晴れているのに、ここでは光が遮られ、湿り気を帯びたひんやりとした空気が漂っている。長く伸びた竹の先端で葉先が風に吹かれてこすれ合う音がする。私は両足でぐっと大地を踏みしめる。仲間と声を掛け合いながら、一本ずつ着実に竹を切り倒していく。これが、私がボランティアとして取り組んでいる除伐作業である。

作業が進むにつれ、林内に少しずつ光が差し込み、暗く湿っていた空間が和らいでいく。地面の土や落ち葉の様子も、次第にはっきりと見えてくる。ひと仕事を終えたことに達成感を感じながら、この変化を目にした時、私は森林の状態が水や生き物の環境にまで影響しているのではないかと考えるようになった。

なぜ私はこのような保全活動に取り組んでいるのか。その始まりは、幼い頃に見たホタルの光だ。横浜市栄区で育った私は、朝比奈の上郷自然の森の近くを流れるいたち川で、毎年のようにホタルを見てきた。暗闇の中で静かに揺れる光は、自然を愛する私の原点だ。

しかし、その光が次第に少なくなっている。なぜ、このような変化が起きているのか。

その原因を調査すると、ホタルの幼虫はタニシなどを餌とし、ホタルの個体数は餌となる生物の量に大きく依存する。さらに、タニシは水中の植物プランクトンを主な餌とし、水質の変化がプランクトンの量に影響を与え、それがタニシの個体数、さらにはホタルの個体数へと段階的に影響していく構造になっている。つまり、水質の変化が食物連鎖を通じ、段階的に生態系に影響を及ぼしているのだ。

さらに、ホタルの幼虫が生息する草むらの減少や、外来種の増加などの周囲の植生の変化が、水の状態や生物の生息環境に影響を与えていた。川の水だけではなく、川の周囲の環境も含めた複合的な要因が、水質を左右するのである。

さて、改めて私の除伐作業を見つめ直すと、森林の状態が水環境に与える影響がより具体的に理解できる。密集した竹を間引くことで林内に光が差し込み、下草や低木が育つようになる。すると、根や落ち葉によって土壌が発達し、水が浸透しやすくなる。さらに、土壌によるろ過作用が働くことで、水の濁りや栄養分の流出が抑えられ、水質の安定につながる。このように、森林の整備は水を蓄え、浄化し、安定して供給するという極めて重要な役割を担っているのである。

神奈川県では、私たちが日常的に使っている水の多くが、丹沢山地などの水源地域の森林によって支えられている。丹沢山地は多様な動植物が生息する生物多様性の豊かな地域であり、その豊かな自然が水を蓄え、育みながら、私たちの暮らしを支えている。山に降った雨は森林に蓄えられ、時間をかけて川へと流れ出し、やがて人々の生活の中で利用されている。その背後には、丹沢山系に抱かれた神奈川県全体の豊かな水と森のつながりが広がっている。そうした大きな自然の一部として自分の地域があることに気づいたとき、この環境を守り、未来へつないでいきたいという思いが一層強くなった。

森林での除伐という一見小さな活動も、水を蓄え、浄化し、安定して供給するという大きな水循環の一部である。丹沢山系に支えられた神奈川県の水環境も、自然を愛する団体や市民ボランティアの一人一人の切なる想いの積み重ねによって成り立っている。

私はこれからも、この地域の自然と向き合いながら、森林と水のつながりを意識した行動を続けていきたい。そして、自分の体験や学びを発信し、水と森の大切さを多くの人に伝え、この環境を未来へとつないでいきたいと考えている。

中央審査会特別賞（優秀賞）

人々の生活と水

インド　ニューデリー日本人学校　一年　佐藤　美瑳紀

私は約一年前に父の仕事の都合で南アジアにあるインド共和国の首都ニューデリーに引っ越した。

私が住むインド共和国には、有名な川であるガンジス川がある。インドの人々にとってこの川は、生活の水であると同時に、信仰の象徴でもある。

朝日が昇りはじめるころ、ガンジス川は多くの人で賑わっていた。その岸辺には、多くの人が集まり、手を合わせて祈りを捧げている。川から立ちのぼる水のにおいと、朝のひんやりとした空気が混ざり合い、そこには独特の雰囲気があった。

人々はゆっくりと水に手を入れ、顔を洗い、あるいはその水をすくい上げて空へと返す。その動きのひとつひとつには、長い年月をかけて受け継がれてきた意味が込められているように感じられた。単なる習慣ではなく、生き方の一部のようにも見えた。

私にとって水は、これまでただ生活に欠かせない存在だった。飲み水として、料理や手洗いのために使う、当たり前のものだ。しかしこの場所では、水はそれ以上の意味を持っていた。人と神とをつなぐもののようにさえ感じられた。日本とは違う文化や宗教により、ガンジス川は「神聖な川」とされていた。

しかし同時に、私はインドの水の現状についても知っている。都市の急速な発展や人口の増加により、川や地下水の汚染は深刻になっている地域も多い。本来なら人々の生活を支えるはずの水が、十分に安全とは言えない場所もある。それでも、人々は水とともに生きている。ガンジス川もそうだ。決して川の水が綺麗だとは言えない。工業排水、ゴミ、下水道の未整備による汚水の直放、さらには遺体や火葬の灰が流されることで、世界で最も汚染された川の一つとなっている。水を飲めば、病気になるリスクもあり、衛生環境は非常に悪い。

けれど、川の水が綺麗でなくても、人々はそこに迷いなく触れる。その姿を見て、私は不思議に思った。なぜ人々はこの水に、この川にこれほどまでに祈りを託すのだろうか。

しばらく考えているうちに、少しだけ分かった気がした。水はすべてを受け入れ、そして流していく。悲しみも、後悔も、言葉にならない願いも、何もかもを抱え込みながら、それでも止まることなく流れ続ける。その水の姿は、人々にとって救いのような存在なのかもしれない。日本にも「水に流す」という慣用句があるように、人々は水に触れることで、自分の心の重さをそっと預けるのだと思う。そして同時に、水に対して感謝と祈りを捧げているのだろう。

流れ続けるガンジス川について考えながら、私は思った。水とは、ただ命を支えるものではなく、人の心に寄り添い、祈りを運ぶ存在であるということ。水は単なる資源ではなく、日々の生活を支える存在として、人々の心の中に深く根付いているということ。それと同時に、その水を守っていくことも、これからの時代の大切な課題なのだと感じた。水と出会っていくことで、異なる文化の中で水に対する向き合い方を知ることができた。日本とインドの水との関わり方と比べると、その違いはとても大きい。しかしどちらが正しいというわけではなく、それぞれの土地の歴史や文化の中で形づくられてきたものなのだということを感じた。

これからも私は、水と人との関係について考え続けていきたいと思う。

ふと、窓の外を見ると、「人々の生活」と「水」の関わりを一番近くで知ることができる、インドの景色が広がっていた。

別紙2

第48回全日本中学生水の作文コンクール　入賞者・入選者一覧

賞名	都道府県名	作文の題名	学校名	学年	氏名
内閣総理大臣賞	神奈川県	水の音が変わった日	横浜市立樽町中学校	2	背黒　五希
農林水産大臣賞	東京都	奇祭「水止舞」が教えてくれること	東京都立桜修館中等教育学校	3	南　穂香
経済産業大臣賞	群馬県	田んぼに映るもう一つの空	群馬大学共同教育学部附属中学校	3	小林　衣智花
国土交通大臣賞	愛媛県	一滴の雨水をつなぐ	愛媛大学教育学部附属中学校	3	弘松　詩菜
環境大臣賞	徳島県	街の宝物「のぞみの泉」が繋ぐもの	鳴門教育大学附属中学校	1	岡本　環菜
全日本中学校長会会長賞	静岡県	小さな手助け	静岡市立大川中学校	3	牧野　翔
水の週間実行委員会会長賞	北海道	水の日からつながる世界	北海道教育大学附属函館中学校	3	伊東　心凪
独立行政法人水資源機構理事長賞	香川県	水の明日を考える	丸亀市立南中学校	2	萩原　美姫
シャワーズ賞	神奈川県	水循環の中に見つけたつながり	横浜市立横浜サイエンスフロンティア高等学校附属中学校	3	前田　想悟
中央審査会特別賞	インド	人々の生活と水	ニューデリー日本人学校	1	佐藤　美瑳紀
（入選30編）	北海道	価値ある日本の水	栗山町立栗山中学校	2	水野　天護
	福島県	正しく知る為に水を熟考する	郡山市立大槻中学校	2	桑名　優空
	富山県	水の旅―立山から富山湾へ―	富山大学教育学部附属中学校	2	奥　望帆子
	富山県	豊かな水を未来に	富山大学教育学部附属中学校	3	牧野　葵
	福井県	水がつないでくれるもの	福井市大東中学校	3	髙間　瑞葵
	福井県	気付かせてくれた先代マンボウ	福井市大東中学校	3	廣野　新太
	福井県	水を繋いで	福井市大東中学校	3	西脇　美結
	静岡県	みんなで取り組むいつも以上の節水	静岡県立浜松西高等学校中等部	1	縣　ひかる
	大阪府	私の中の60%の同居人	大阪府立水都国際中学校	3	藤野　琉菜
	兵庫県	私の大好きな水辺の風景	西宮市立山口中学校	3	太田　紗
	兵庫県	日本に生まれて	洲本市立由良中学校	3	森　亮太
	奈良県	水に感謝して生きる	山添村立山添中学校	2	植田　瑛翔
	和歌山県	蛇口から流れる、終わりのない物語	和歌山信愛中学校	2	下間　衣桜
	島根県	「その一滴を、忘れない」	島根大学教育学部附属 義務教育学校後期課程	9	青山　和
	岡山県	水の記憶	岡山学芸館清秀中学校	2	西澤　暁成
	広島県	蛇口のむこうに続く一本道	福山市立福山中・高等学校	1	新田　彩
	広島県	宇宙と大地をつなぐ「一滴」の記憶	広島大学附属福山中・高等学校	3	新田　晃平
	徳島県	うちの川を守るために	神山町神山中学校	3	中南　礼
	徳島県	水と私	鳴門教育大学附属中学校	1	先田　花奈
	徳島県	自然と共に生きる水	鳴門教育大学附属中学校	1	田中　優衣
	愛媛県	温泉の街に生きる僕たちの責任	松山市立鴨川中学校	3	木下　圭悟
	高知県	貯水率低下による新たな気付き	高知市立春野中学校	3	土居　悠輝
	佐賀県	水の怖さを知り、水に感謝した日	佐賀市立芙蓉中学校	3	西久保　結唯
	佐賀県	僕の家の近くの川	佐賀大学教育学部附属中学校	2	松枝　宗一郎
	長崎県	蛇口の先にある、見えない絆	純心中学校	3	川本　珠琴
	宮崎県	分かち合う水、つながる世界	宮崎大学教育学部附属中学校	3	岩本　愛加
	鹿児島県	教室の窓から	志學館中等部	3	宮脇　愛
	鹿児島県	食卓からの節水宣言	鹿児島市立河頭中学校	3	川井田　彩果
	オーストラリア	水がつなぐ日本とオーストラリア	パース日本人学校	1	ギャラハー　陽
	インド	茶色い水が教えてくれたこと	ニューデリー日本人学校	3	金子　若桜